

平成27年度研究成果報告書《平成26年度指定教育課程研究指定校事業》

都道府県・指定都市番号	23	都道府県・指定都市名	愛知県	研究課題番号・校種名	3 (4) 小学校
				領域名	E S D
研究課題	<p>新学習指導要領の実施を踏まえた、学校全体での教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p> <p>(4) E S Dを学校全体で体系的に推進するために、各教科等の連携により、持続可能な社会づくりに関わる課題を見だし、それらを解決するために必要な能力や態度を児童生徒に身に付けさせるための教育課程の編成、指導方法等の工夫改善に関する実践研究</p>				
ふりがな 学校名 (児童生徒数)	<p>おかざきしりつおとがわしょうがっこう 岡崎市立男川小学校 (児童数606人)</p>				
所在地 (電話番号)	<p>愛知県岡崎市大平町字中道17番地 (0564-22-1159)</p>				
研究内容等掲載ウェブサイト URL	<p><a href="http://www.oklab.ed.jp/weblog/otogawa/">http://www.oklab.ed.jp/weblog/otogawa/</a></p>				
研究のキーワード	<p>・E S Dカレンダーと重点単元指導計画 ・専門家から学ぶ授業 ・元気調べ ・学習過程 (ひとり学習, 関わり合い, 振り返り) ・男川ユネスコフェスティバル</p>				
研究成果のポイント	<p>① 「E S Dカレンダー」と「重点単元指導計画」による教科・領域の関連 ② 専門家や地域から知識や情報を得ることによる子供の学びの広がり ③ 「ひとり学習」の充実から深まる「関わり合い」を通じた「振り返り」 ④ 「男川ユネスコフェスティバル」での学びの共有</p>				

1 研究主題等

(1) 研究主題

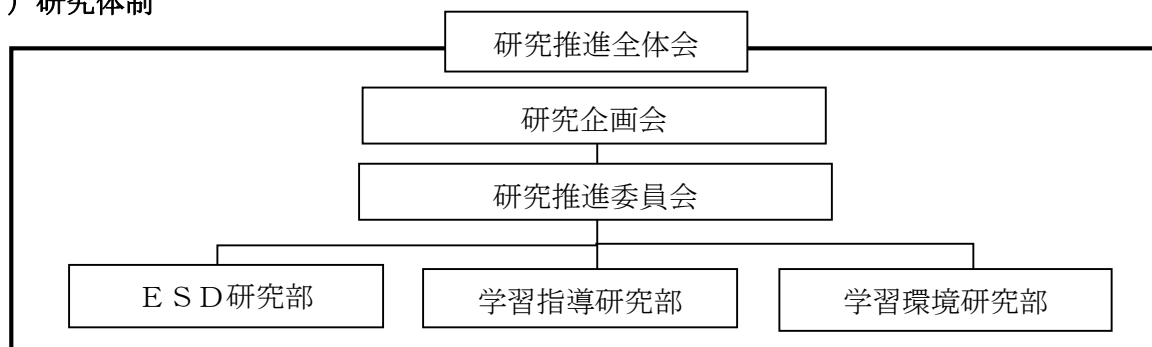
E S Dの視点に立つ教科学習の展開

～相手意識を持って関わり合い、思考・判断・表現できる子供の育成～

(2) 研究主題設定の理由

子供たちが将来生きる社会には、環境や国際関係、多文化共生など様々な問題が山積している。こうした未来を見据えたとき、子供たちに、自ら課題を見つけ、他の人や身の回りの事象と関わり合い、積極的に課題を解決していく資質や能力を育む必要があると感じた。そのためには、教科学習を通して、子供自身が課題に関わる知識や情報を持ち、それらを活用した思考力・判断力・表現力を身に付けることが大切である。そこで、教科・領域の関連を図り、系統的、発展的に扱った大単元を設定することを計画し、子供たちが学んだ内容と、周りの人々や社会、自然環境など今日的な課題とのつながりを意識できるようにしたいと考えた。このようなE S Dの視点に立ち、課題に対して自分事として切実感を持ち、共に生きる未来のために身に付けた資質・能力を生かして行動できる姿を願い、本研究に取り組んだ。

(3) 研究体制



(4) 2年間の主な取組

平成26年度	<p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 講話「研究主題の捉え方と研究の進め方」講師：校長</li> <li>・校内研修会「学級組織の作り方」「学級開きの留意点と指導の実際」講師：教頭</li> <li>・校内研修会「E S Dとは」講師：研究部長</li> </ul> <p>5月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 講話「具体的な授業展開の指導の要所」講師：校長</li> <li>・師範授業参観 6年1組 算数 授業者：校長</li> <li>・研究全体会 講話「本校のE S Dの捉え方」講師：校長</li> </ul> <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内授業研究会 講話「授業づくりの基本姿勢」 講師：金津 琢哉 氏（東海学園大学准教授）</li> </ul> <p>8月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 協議「7月までのE S D重点単元の考察と今後の課題」</li> <li>・研究全体会 講話「授業構想とE S D」「全国の研究推進の動向」 講師：伊倉 剛 氏（文科省国立教育政策研究所，研究開発部研究開発課指導係長）</li> <li>・自主研修会「教材研究の要所と指導案の書き方」講師：研究部長</li> </ul> <p>9月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 協議「9月からのE S D重点単元の検討」</li> <li>・授業研究会 講話「E S Dの進め方と思考力・判断力・表現力の育成に向けて」 講師：田村 学 氏（文科省国立教育政策研究所，教科調査官）</li> <li>・自主研修会「教育論文の書き方」講師：研究部長</li> </ul> <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内授業研究会 講話「E S Dを捉えた学習指導」 講師：杉澤 学 氏（奈良女子大学附属小学校教諭）</li> </ul> <p>11月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 協議「これまでのE S D重点単元の考察と今後の検討」</li> <li>・全学級研究授業，授業反省会 指導：岡崎市教育委員会・岡崎市教科領域指導員</li> </ul> <p>1月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内授業研究会 講話「言語活動を踏まえた指導と評価の在り方」 講師：佐藤 洋一 氏（愛知教育大学教授）</li> <li>・校内授業研究会 講話「E S Dを捉えた単元構成の仕方」 講師：小幡 肇 氏（愛知学泉大学講師）</li> </ul> <p>2月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会「男川ユネスコフェスティバル」 E S Dの学習成果の発表，学びの交流（保護者参観により地域に発信）</li> </ul>
平成27年度	<p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会 講話「各教科の思考力・判断力・表現力の見取り方」講師：校長</li> <li>・校内研修会「E S Dカレンダーと重点単元指導計画の作り方」講師：研究部長</li> <li>・校内研修会「子供の関わらせ方の指導の要所－『元気調べ』－」講師：研究部長</li> <li>・文部科学省連絡協議会において研究指導 講師：田村 学 視学官</li> <li>・師範授業参観 6年3組 算数 授業者：校長</li> </ul> <p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内授業研究会「E S Dの視点に立つ地域に根ざした授業構想・授業展開」 講師：澤井 陽介 教科調査官</li> <li>・校内研修会「生活単元学習の進め方」 講師：鈴木 孝広 氏（愛知教育大学附属特別支援学校 教員）</li> </ul> <p>7月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会，研究部会，学年部会，教科部会</li> </ul> <p>8月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・E S Dカレンダーと重点単元指導計画の修正</li> <li>・研究発表会における授業の指導案検討会</li> </ul> <p>9月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・校内研修会「E S D実践に向けた体育からのアプローチ」 講師：鈴木 尚子 氏（中京大学教職センター 指導官）</li> </ul> <p>10月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・男川小学校研究発表会 全23学級授業公開 教科別研究協議会 講師：鈴木 尚子，金津 琢哉 氏，鈴木 孝広 氏 他</li> <li>・全体会講演「E S Dの視点に立つ教科学習の展開」 講師：田村 学 視学官</li> </ul> <p>1月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究全体会，研究部会「実践の成果と研究継続に向けての準備と計画」</li> </ul> <p>2月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・学習発表会「男川ユネスコフェスティバル」 E S Dの学習成果の発表，学びの交流（保護者参観により地域に発信）</li> </ul> <p>3月</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・研究集録「育成98号」の編集と発行 各学級の実践記録と検証（成果と課題）</li> </ul>

## 2 研究内容及び具体的な研究活動

### (1) 研究内容

① ESDの視点に立ち、教科・領域を関連させた大単元を設定することによって、教科の学びと今日的な課題とのつながりに気付かせ、共に生きる未来をつくろうとするために、子供たちが自分の見方・考え方を持つことができるようにする。

- ・教科や単元をつなぐ「ESDカレンダー」の作成
- ・指導内容と目標を明確にし、学びを見通す「重点単元指導計画」の作成
- ・今日的な課題につながる専門家や地域素材を活用した授業の実施
- ・ESDの学びを共有する「男川ユネスコフェスティバル」の開催

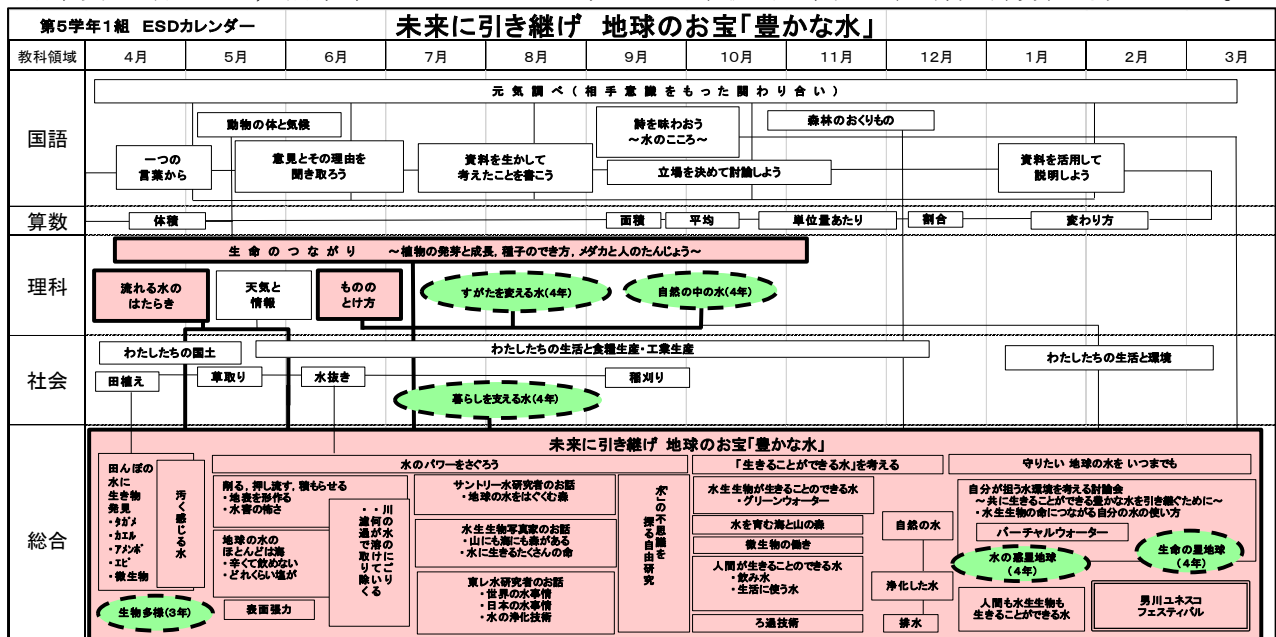
② 「ひとり学習」を基盤にして「関わり合い」や「振り返り」を重視した授業展開の工夫をすることによって、子供たちの思考力・判断力・表現力を高め、課題解決に迫るための資質や能力を身に付けることができるようにする。

- ・相手を意識した学び合いの基盤をつくる「元気調べ」
- ・課題に関わる知識や情報を得る「ひとり学習」
- ・互いの考えを比較、検討し練り合う「関わり合い」
- ・自分の考えを根拠を持って再構築する「振り返り」
- ・教科ごとのESDの視点に立った思考力・判断力・表現力の明示

### (2) 具体的な研究活動

#### ① 教科と単元をつなぐ「ESDカレンダー」と「重点単元指導計画」

昨年度の課題から、前学年までのESDの学びとの系統的な関連（点線丸部分）も見通した。



重点的に扱う単元や題材を太枠で囲み（網掛け四角部分）、この部分の学習活動を具体的に表記した「重点単元指導計画」を作成し、地域素材や専門家の講師について検討を重ね、子供の思考の流れに寄り添い、その学びを発展させることができる支援を講じた。

#### ② 学びを伝え合う「男川ユネスコフェスティバル」

各学級のESDでの取組を全校で共有し合う「男川ユネスコフェスティバル」では、それまで意識したことがなかった身の回りの問題について考え始め、他学年のESD学習と自分が教科で学んだこととのつながりに気付いた。また、発表に向けて、「水環境」を追究した学級と「食料事情」を追究した学級が「バーチャルウォーター」という視点で関わり合い、輸入農産物に隠れていた世界の水事情と日本の食料生産との関わりを見いだす学びに発展する様子も見られた。

### ③ 専門的知識や技術に触れる授業

4年「宇宙の不思議を探ろう」の学習では、宇宙空間の概念を広げるために宇宙物理学の専門家の講義を設定し、3D映像を活用して宇宙空間を疑似体験し、星や月の姿を科学的な見方で捉えられるよう図った。星空を地球とつながる大きな自然として見つめ直し、自然観を豊かにした。

### ④ 朝の「元気調べ」

昨年に続き、朝の会で自由に意見を交わす「元気調べ」の場を設定している。ここで、自分の考えを述べてから、そこに関連する答えを求める質問をするように助言し、共感した理由の述べ方や、代案を持った建設的な批判の仕方を、話術として身に付けられるようにしてきた。

### ⑤ 課題にかかわる知識や情報を得る「ひとり学習」

5年「防災学習」では、自分たちが住むこの地域が被った水害を教材に、地形的に災害の影響を受けやすい要因、近年の気候変動の影響、そして、過去の水害の状況についてなど視点を与え、多面的・多角的に追究できるよう、活用する資料について子供の課題に沿って支援をしながらひとり学習を進めた。子供たちが得た知識を基盤に自分の見方や考え方を持つことは、学びの柱となった。

### ⑥ 「関わり合い」と自分の考えを再構築する「振り返り」

5年「未来に引き継ぎ、地球のお宝豊かな水」では、人間の立場で浄化した水の安全性を主張する意見と、メダカの立場から田や川の微生物の役割を主張する意見が対立した。そこで、浄化した水の源をたどる視点を投げかけ思考を揺さぶると、「川」という接点が見つかり、どちらの立場も同じ水の循環の中で生きていることに気が付いた。対立がつながり関わりが見いだされ、共に生きていくために「川の水を守る」という新たな考え方が、子供の「振り返り」の記述に表れた。

## 3 研究の成果と課題

### (1) 成果

- ① E S Dカレンダーや重点単元指導計画を、学年間の系統的なつながりを意識して作成したことで、既習の知識を活用する力や、得た情報を関係付ける力を高める支援を講じることができた。
- ② 専門家から知識や技術を得ることは、物事や現象の本質に近付き、実感を伴った理解や根拠を持った考えの構築に役立った。子供たちの知的好奇心を刺激することの有用性が感じられた。
- ③ 男川ユネスコフェスティバルの発表では、他学級の学びと発展的につながることで、子供の思考が広がりを見せた。また、他学年の学びと系統的につながることで、次年度の学習に関連付けられそうな教科の知識やE S Dの観点に、新たに視点を向けることができる機会となった。
- ④ 毎朝の「元気調べ」での語り合いは、対立する考えを受け止めたり、答えられない質問に対して他の人に助けを求める声かけをしたりするなど、話合いのやりとりに深まりをもたらした。
- ⑤ 「ひとり学習」から友達のと考えと「関わり合い」をし、「振り返り」で自分の考えを再構築する過程は、前述の「具体的な研究活動」⑤⑥の下線部のような子供の姿から、思考力・判断力・表現力を培う学習過程として有効であったと考える。

### (2) 課題

- ① 1時間の授業を組み立てる中、「関わり合い」の場面で内容が精選されないまま話合いが続き、「振り返り」の場面で時間が足りなくなることが多かった。子供自身の考えを構築する最も大切な「振り返り」の時間を十分に確保できるよう、教師に時間管理の意識を付ける必要がある。
- ② 大単元を設定したことで、その目標にとらわれて、教科の内容が軽くなったり、教科のどの学びと関連するのか明確でないまま学習が進められてしまったりすることがないよう、教科の目標と大単元の目標を照合しながら、十分に検討を重ねて学習の流れを作ることが大切である。

### (3) 指定期間終了後の取組

- ① 継続してE S Dカレンダーや重点単元指導計画を作成し、大単元による実践を積み重ねていく。
- ② 男川ユネスコフェスティバルや授業研究を公開し、実証と発信を続けていく。